

講師ヤオ・オフエイ・アモアベン氏 ご紹介

ガーナ生まれのガーナ育ち。大学で農業を学び、ガーナとナイジェリアの中学校で農業を教える。日本に留学していた兄の影響で来日。日本では玉ねぎ、トマト、オクラなどの野菜を有機栽培している。帰国して父親の意志を継ぎ、ガーナの農業において多様性と生産性を拡大することが夢。

ヤオ氏の父とガーナの農業

今回のお話の中で、お父さんの存在がヤオさんにとっても大きな影響を与えている事がわかりました。名前は Nana Asare Bediako III、ガーナの最多民族アカン族の王様でありながら、自ら農業を営んでいました。ガーナは古くからカカオの生産を行っていましたが、その生産はすべて輸出用であり、ガーナの人々はカカオからチョコレートが作られることさえ知らなかったといいます。そこでヤオさんの父は、「貿易のためではない、生活のため、食べるための食物を作りなさい」と提案しました。これは、それまでほとんどカカオしか生産していなかったガーナの農業にとって、農産物の多様化、農業従事者の自立という面で大きく貢献した出来事でした。

現在のガーナでは農業従事者が人口の約50%を占め、GDP 約30%を占めています。しかしながら、大部分の農業従事者は素手でマスクもせず無防備に農業を撒いたり、伝統的な方法(頭上に大きな荷物に乗せる)で農作物を運んだり、今でも決して満足とは言えない環境で農業を行っているといいます。田舎では道も悪く、物流システムが整っていないためにたくさん生産したとしても市場に出る前に腐ってしまうことも珍しくないとのこと。このような環境で働く農業従事者は、自分たちが貰っている賃金は安いという気持ちはあるものの、政府のサポート等もないため、自分たちにできることがないと感じているそうです。



あなたのガーナのイメージは？

ここまで農業従事者の現状、田舎の現状をお話しいただき、これらはまさに私たちが抱いているガーナへのイメージではないでしょうか。しかし、ここでヤオさんは違ったイメージを投げかけます。整備された道路、ファッションモール、高級車…都市部の写真が、これまでの農業従事者の生活と対比されました。この対比からもわかるように、ガーナにおいても貧富の差は深刻だと、講演後のインタビューでおっしゃっていました。



ヤオさんは、ミュージシャンとしても活動なさっているということで、3曲披露していただきました。その中で、印象に残った歌詞をご紹介します。

“Self-sustaining and self-reliant. Flourishing like a palm tree.” (しっかりと自らの足で立ち まるでヤシの木のように豊かに繁栄するアフリカ) この歌詞に、ヤオさんのお父さん、そしてヤオさんの、ガーナを含むアフリカの国々、アフリカの人々の自立を望む気持ちが強く感じられました。

日本と現地の朝を繋ぐライブレポート！

今回新たな試みで、ライブトーク「ガーナの朝を現地リポート」を行いました。スカイプ（インターネット電話サービス）を利用し、日本とガーナをテレビ電話で繋ぐというものです。回線状況が不安定で、長い時間のやり取りはできませんでしたが、パパイアの広大な農場を背景に、ヤオさんのお兄さんとお話することができました。

外から見るガーナ・内から見るガーナ。ある側面から見ただけでは分からないことはたくさんあります。自分の抱えているイメージがすべてではないという、当たり前だけれども忘れがちなことを再認識させてくれました。もともとは、環境問題を語る際に使用される言葉ですが、Think globally, Act locally.という言葉があります。ガーナの現状を知り、日本・熊本で行動する。フェアトレードなどの選択肢から自分ができることをする姿勢が大切だと感じました。